

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

墓場のジョン・ダン：

「別れ、窓に彫られた私の名前」におけるスペクタクル化された復活

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-10-05 キーワード (Ja): ジョン・ダン, 肉体, 復活, 恋愛詩, 説教 キーワード (En): 作成者: 友田, 奈津子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008047

墓場のジョン・ダン

—「別れ、窓に彫られた私の名前」におけるスペクタクル化された復活—

友 田 奈津子

要 旨

ジョン・ダンは自分の死を熟考し、その思索によって編み出されたイメージを聖俗の壁を超え、展開した詩人として知られている。中世以来の「死を想え」という語に縮約された感性は、ルネサンス期においても見られ、当時、こうした死への省察は、肉体と魂を二元論的に捉える新プラトン主義の浸透などにより強調され、高慢を抑制する方策として肉体への蔑視を生んだ。執拗に肉体を「塵・土塊」と呼ばせ、さらには魂にとっての「牢獄」であるとするネガティブな表現は、ダンの作品においても度々現れることとなる。しかしダンは、こうした伝統に則った身体描写に揺さぶりをかけ、彼独特の詩想によって、ほかにほとんど見られることのない愛と死、そして復活をテーマとする詩を生み出した。本稿では、「別れ、窓に彫られた私の名前」を中心に、この作品の舞台となるガラスに注目し、「復活」というキリスト教の中心的教義をいかに詩人が詩の中で描いたかを考察する。

キーワード：ジョン・ダン、肉体、復活、恋愛詩、説教

はじめに一復活神学

キリスト教において「復活」(resurrection)は信仰の中心的な教義である。キリストの十字架上での死とその後の復活は、神の救いへの信仰をキリスト者に齎した。そのため四旬節から始まる復活祭はキリスト教教会において最も重要な典礼の一つとされる。この復活の教義は、現代に至るまで、常に説かれ、キリスト教の骨子となってきた。

キリストが磔刑より3日後、弟子たちの前に現れ示したのは、魂のみならず「肉体」を伴った復活である¹⁾。このことから、「復活」は魂と肉体の両方を意味する。復活という概念自体は、キリスト教以前より、例えばギリシャをはじめとする地中海文明においては、肉体は滅びるものの、魂は再生される、あるいは肉体とは別に生き続け、魂は不滅であるということが、一般的な概念とされてきた。しかし、キリスト教の特異な点は、最後の審判の前、全世界のキリスト者の死者の肉体を、たとえそれが一度朽ち果て土に還っていたとしても、文字通り復活させるという教義を取ることにある。死者は魂と肉体を持つ存在として審判に臨む。

靈魂を不滅とする思想はギリシャ哲学がキリスト教に影響を及ぼしたもののだが、ギリシャ哲学が肉体と靈魂の関係性を対立と捉え、死者は魂だけになっても輪廻転生すると考えるのに対して²⁾、キリスト教は、魂はもちろんのこと、肉体を死者の復活に不可欠であることを聖書的真実とした。しかしこの死者の肉体の復活という「真実」は、非キリスト者のみならず、信徒の中にも議論を生んできた³⁾。そして、この議論は16世紀の宗教改革期を経たのち、17世紀の科学革命が興る中、経験主義的思考を吸収しつつあった初期近代の文人たちにおいても大きなテーマとして論じられた。17世紀は歴史上イングランドにおいて最も活発に宗教が論じられた時代であり、英国国教会、プロテスタント、そしてカトリックがそれぞれ神学上の見地を主張し、議論し、相互に弾劾した。それらが出版文化の隆盛と相俟って、世に広まり、百家争鳴の様相を呈した。伝統からのパラダイム転換の渦中であって、キリスト者は各々が省察することを求められ、教理の再定義、再認識に程度の差はあれ、参画を余儀なくされた。

この時代、詩人たちもまた、おもに宗教詩において、復活の神秘を再表象し、信仰心を詩行を通して深化させた。この時代の詩人の中で、ジョン・ダン (1572-1631) はとりわけキリスト教における「肉体」と「復活」のテーマに関心を示した詩人として知られる。難解な哲学的、神学的思考を銜学的な詩句で語った17世紀の形而上派詩人の中心的人物であり、またカトリックから英国国教会に転身した後、聖ポール大聖堂の首席司祭にまで上り詰め、神学者、そして当時もっとも高名な説教師の一人としてその地位を獲得した。世俗の世界から聖職者の世界への転身という立場の変化はあったものの、ダンは説教においてはもちろんのこと、詩作品においても「肉体の復活」という神秘を語った。宗教詩においては2編の「復活」をタイトルに冠する作品を残し、さらに恋愛詩においてでさえ、躊躇うことなく世俗的な言説の中で用いる。

ダンの復活論に関しては、昨今研究が新たな段階に入ったところである。復活について語る際、必ず問題となる霊肉二元論、あるいは一元論の問題に関して、ダン研究の多くが霊に対して対照的な存在としての肉体をテーマにした、あるいは肉体の物質性に焦点を当て、科学的見地から肉体を論じるものであった⁴⁾。本稿で論じる復活を想定する肉体についての研究は、近年、ラミー・ターゴフが肉体と靈魂との関係性を、死後においても切り離せないものとして捉えることにより、ダンの身体論に新たな道を拓いた⁵⁾。そしてさらにダニエル・ジュリアン・ジルが17世紀の復活神学を文学作品から見ることにより、科学革命期の信仰の在り方を読み解く試みをした⁶⁾。本稿では、神学論争を熟知しながらも、あえて恋愛詩の中でこのキリスト教の中核をなす教義である復活を語る詩人の、聖俗を越境するスペクタクル化された復活シーンを目撃することにより、その最大限まで世俗化された復活のヴィジョンがどのように詩以外の彼の作品においても現れるかを説教、そして妻のために作成した墓碑銘において確認する。

1. 肉体論

ダンは正しく復活神学の信奉者である。すなわち、復活の際には靈魂は当然のことながら、肉体も復活すると思考した。その彼にとって肉体とはいかなるものであったのか。

肉体をどう描くかにあたって、ルネサンスにおいては不完全である人間存在を完璧なものへと修正しなければならないという思想から、ことさら若々しく美しい女性の肉体を理想とする美学が生まれた。こうした美学に対して、ダンは定石を外した女性の美を描く⁷⁾。

Call not these wrinkles, *graves*; if *graves* they were,
They were *Loves graves*; for else he is nowhere.
Yet lies not Love *dead* here, but here doth sit,
Vow'd to this trench, like an *Anachorit*.
And here, till hers, which must be his *death*, come,
He doth not digge a *Grave*, but build a *Tombe*.
.....

If transitory things, which soone decay,
Age must be loveliest at the latest day.
But name not *Winter-faces*, whose skin's slacke,
Lanke as an unthrifts purse; but a soules sacke;
Whose *Eyes* seeke light within, for all here's shade;
Whose *mouthes* are holes, rather worne out, then made;
Whose every tooth to a severall place is gone,
To vex their soules at *Resurrection*;
Name not these living *Death-heads* unto me,
For these, not *Ancient*, but *Antique* be.
I hate extremes; yet I had rather stay
With Tombs, then Cradles, to weare out a day.⁸⁾ (“The Autumnall” 13-8, 35-46)

恋愛詩集『唄とソネット』(*Songs and Sonets*)に収められた本作品は、エロティックかつグロテスクな身体表現により、一般的に認識される哀悼の詩のジャンルであるエレジーに対する再認識を求めるダンのエレジー「秋の顔」である。人間の年齢を季節で表し、美を論じる本作品の中で言及されるのは「秋」、そして「冬」である。女性の美しさについて、例えばルネサンスの巨匠ボッティチェリ(1445-1510)が美の化身である三美神を『プリマヴェーラ』(『春』)

で描いたように、春こそが美を擬えるのに最も相応しいとするところ、ダンはある「秋」だと主張する。ルネサンスが提出した究極の美の姿をあえて外していく詩人の独特な美的感性は、老年に差し掛かった皺の刻まれた女性の生身の肉体を詳述させ、肉体に刻まれた「皺」をこそ愛すとする。“Call not these wrinkles, *graves*” と、「墓」と並置される「皺」は、その連想を否定しつつも、詩人は続く行で改めてこの「皺」は単なる「墓」ではなく、“*Loves graves*”、「愛の墓」だとする。引用1行目から2行目に提示した、たった2行の中に3度現れる“*graves*”への言及によって、肉体と墓は同一視される。詩人にとって、肉体の美そのものを語る事が目的ではなく、墓を語ることであったことが示唆される。この墓によって促される死の連想はさらに拡張され、「両極端を嫌う」という理由で否定されたはずの「冬の顔」について、詩人は残酷なまでに生々しく最晩年の「生ける頭蓋骨」と化した顔について、滅び行く姿の、萎んだ肌、落ち窪んだ目、欠けた歯などを詳細に描いていく。肉体の美について、体の各部位をそれぞれ称賛するブラゾンのテクニックを援用し、肉体のグロテスクさを滑稽に展開していく詩人がクローズアップするのが「復活」である⁹⁾。この作品のテーマ、そして描写の滑稽さを考えると、この文脈の中で復活について口にするのはほとんど冒瀆的であろう。しかし、最も聖なるものと俗なるものを瞬時に組み合わせることによって、スリリングな詩空間を生み出すことを可能にするダンにとって、肉体を語る時、復活ほど適切な主題はない。

ダンが肉体について言及する際、復活の教義が常に思考の中心にあることが見て取れる。最後の審判の前に、朽ち果て散逸してしまった肉体が再び集められ、修繕され、復活する神秘について強い関心をダンが示す。果たして、死体が再生可能なのか、という議論は古代よりなされてきた。ダンは、経験主義が台頭し科学的精神の萌芽に敏感な反応を示しながらも、肉体の復活を非合理的なものとはしない。「最後の日において老齢ほど美しいものはない」、そして、「1日を過ごすには、／揺籠よりもむしろ墓場にいたい」、と老いの美を認め、その老いた肉体の最後の目的地である墓場に対する偏愛が見られる思考の中には、肉体の復活がア・プリオリなものとして設定されている。

さらにこうしたダンの死者の肉体の復活への拘りは、むしろ理想化された肉体ではなく、墓の中で腐敗し、土に還っていくリアルな身体に注視する¹⁰⁾。肉体は理想の美の状態に留め置かれるのではなく、この世に生を受けてから死に至るまでの間に常にその素材を変化させる。

...till us death lay
 To ripe and mellow here, w'are stubborne Clay.
 Parents make us earth, and soules dignifie
 Us to be glasse; here to grow gold we lie.
 Whilst in out soules sinne bred and pamper'd is,

Our soules become wormeaten carcasses;
 So we our selves miraculously destroy.
 Here bodies with lesse miracle enjoy
 Such priviledges, enabled here to scale
 Heaven, when the Trumpets ayre shall them exhale.¹¹⁾ (“Epitaph on himself” 6-14)

詩人は「土塊」「ガラス」「黄金」という肉体の3段階の変化を語る。肉体が朽ちゆく土塊であるとする見方は「秋の顔」でも顕著であったが、この自分のために作成した墓碑銘においてはさらに、この世に生を受けた自らの、そして死を迎え、墓に埋葬される身体の変化が明確に描かれる。すなわち、土塊として作られた体が、魂によってガラスに高められ、さらには死後墓の中で黄金になるという奇妙な主張がなされる¹²⁾。このように3段階の肉体の変容を述べた後、復活を告げるラッパの音が鳴り響く。最後の審判の日における人の救済、すなわち完全なる肉体と魂の復活こそが、ダンにとって最大の関心の対象であったことがこの墓碑銘においても明記されている。

肉体を「土塊」と表す聖書的表現、そして墓の中で「黄金」と変質させる描写には、科学の原型である錬金術からの影響が見られるが、ここで最も異様なのは身体を「ガラス」と見做すことであろう。ダンは、古代文明の時代より用いられ、紀元前1世紀頃のローマにおいて吹きガラスの製法が開発され、近世においてヴェネツィア製のガラス製品が教会の聖具として、あるいは宮廷における装飾品として用いられるようになっていたガラスを身体表象に用いる。

2. ガラスの身体

肉体の物質性に拘るダンがガラスを身体の素材として描いた作品が、「別れ、窓に彫られた私の名前」(“A Valediction: of my name, in the window”)である¹³⁾。この奇妙な身体、ガラス化された身体を持つ男の語りを見ていこう。

I

My name engrav'd herein,
 Doth contribute my firmnesse to this glasse,
 Which, ever since that charme hath beene
 As hard, as that which grav'd it, was;
 Thine eye will give it price enough, to mock
 The diamonds of either rock.

II

‘Tis much that Glasse should bee
As all confessing, and through-shine as I,
‘Tis more that it shewes thee,
And cleare reflects thee to thine eye.
But all such rules, loves magique can undoe,
Here you see mee, and I am you. (1-12)

本作品は、恋人の傍から離れざるを得ない状況になった詩人が、恋人の部屋の窓に名前を刻んでいき、この名前がそこには存在しない詩人の分身として、彼女が浮気しないように見張っているという、一見コミカルな口調で歌われる恋愛詩である。しかしここで用いられるモチーフはこの詩を一筋縄ではいかない作品に仕上げている。まず詩人はこのガラスの性質を再定義することから着手する。下線部を引いた「硬さ」(“firmness”)と「透明性」(“through-shine”)がガラスの性質を決定するキーワードとなる。「硬さ」について、1 聯目冒頭において、本来脆いガラスに語り手である詩人の性質を付与することによって、ガラス本来の性質を転倒させる。このガラスの「硬さ」は、“firmness”に“hard”という語を加え、ダイヤモンドをも凌駕する硬度であると強調される。

さらに第2 聯では、ガラスの最大の特長「透明性」が強調される。“through-shine as I”という比喩が示すように、「硬さ」に加え、「透明性」という特性がガラスに与えられ、ガラスと詩人は等価の存在とされる。ガラスと一体化した詩人はさらに、このガラスを「鏡」とする。ガラスを鏡として見るという発想は、近代人が自己成型の過程で、鏡像にアイデンティティを認識したという観点からも魅力的だが、ダンのガラスはこの発想をもすぐさま超克していく。“cleare reflects thee to thine eye”と、鏡が透明であればあるほど、反射するという性質を逆に失い、“all such rules, loves magique can undoe”というように、このガラスにおいては、愛の魔法が作動し、あらゆる常識を覆し、“I am you”、「私はあなたに」なるというのだ。シンプルに連結動詞で結ばれるIとyouは比喩ではなく、文字通り同じ存在とされる。詩人は肉体という障壁を超え、愛し合う者がガラスの中で溶け合い合一するという愛の神秘をこの透明性の中に見出す。

このようにダンが展開するガラスを用いた身体表象が、当時どの程度一般的なものであったのか、あるいはそうでなかったのかを、同時代の詩人であり劇作家、そして翻訳家でもあったジョージ・チャップマン(1559? -1634)のガラス化した男の描写を確認してみよう。

I know this body but a sink of folly,
The ground-work and raised frame of woe and frailty;
The bond and bundle of corruption;
A quick corse, only sensible of grief,
A walking sepulchre, or household thief,
A glass of air broken with less than breath...

(*The Tragedy of Charles Duke of Byron* V. iv. 32-7)

虚栄心により国王に反逆し、最終的には処刑されたフランスの貴族を主人公にした1608年出版の『バイロン公チャールズの陰謀と悲劇』のガラス表象は、ガラスの持つ「脆さ」という概念を前面に打ち出す。“A quick corse”そして“A walking sepulchre”という「生きた死体」、「歩く墓」という文言は、当時の比較的小さな出版市場にあって、版を重ねベストセラーとなっていたエラスムス（1469-1536）の『格言集』からの引用であり¹⁴⁾、ダンを含め、英詩においてたびたび使用される死すべき運命にある身体のイメージを端的に言い表した表現である。ここにチャップマンはガラスの物質的イメージを加えていく。処刑を目前にしたバイロン公は、自分の肉体をガラスに喩える。肉体は「呼吸よりも小さな力でも壊れてしまうガラス」のようなものと言及されるように、いとも容易く壊されてしまうガラスの儚さ、脆さが悲劇的なトーンで強調されていく。初期近代ガラスの身体を持つ人間が言及されるとき、その多くがガラスの「壊れやすさ」を廻るものであった¹⁵⁾。それは今日私たちが心を表現するのに、「ガラスの心」と表現するのと同様の発想から生じるものであろう。魂の不滅性を信じる当時の人々にあって、身体のほうこそガラスの如く、脆く壊れやすいものであったのだ。けれどもダンがガラスを描く時、そこには脆さを思わせる表現はほとんど見られない。

3. 透明な身体

ダンがガラスの身体をその脆さとして忌避するのではなく、賞賛の対象として捉える。

You, for whose body God made better clay,
Or tooke Soules stufte such as shall late decay,
Of such as needs small change at the last day

This, as an Amber drop enwraps a Bee,
Covering discovers your quicke Soule; that we

May in your through-shine front your hearts thoughts see.

You teach (thou wee learne not) a thing unknowne
To out late times, the use of specular stone,
Through which all things within without were shown.

Of such were Temples; so and of such you are;
Beeing and *seeming* is your equall care...¹⁶⁾ (“To the Countesse of Bedford” 22-32)

有力なパトロンであったベッドフォード伯爵夫人に宛てたこの書簡詩において、彼女への称賛の手立てとして、詩人は透明な物質に着目する。彼女の肉体に相応しいのは、「より良い土塊」、「魂の素材」、あるいは「最後の日までほとんど変化しないもの」と条件が列挙され、これら3つの条件を兼ね備えた素材として、“Amber”と“specular stone”が提示される。蜜蜂入りの琥珀、古人が透明な神殿を造るのに用いたという伝説の透明石という、称賛に相応しい珍しくも煌びやかな道具立ての中に、“Covering discovers”と、「覆いつつも、覆いを取る」という撞着語法が示すように、覆っても機敏な魂を隠すことなく見せるその物質の特性に詩人は魅了されている。外観的美しさもさることながら、内面を表に見せることを可能にする、すなわち“*Beeing*” / “*seeming*”を等価にするのは、これらの物質の透明性であるとし、この女性の肉体と、その肉体に内蔵される魂を最大限に称賛してみせる。こうした称賛対象へのいささか誇張された詩行の中で用いられる“through-shine”という語は、詩人が自分とガラスとを一体化させた時に用いた表現と同じであり、詩人にとってガラスの身体とは、その透明性ゆえに理想の身体として彼の心を捉えていたことが確認できる。

こうした透明性は、愛について語られる時、その神秘性が強調される。

Stand still, and I will read to thee
A Lecture, Love, in loves philosophy.
 These three houres that we have spent,
 Walking here, Two shadowes went
Along with us, which we our selves produc'd;
But, now the Sunne is just above our head,
 We doe those shadowes tread;
 And to brave clearnesse all things are reduc'd.¹⁷⁾ (“A Lecture upon Shadow” 1-8)

この「影についての講義」において、自分たちの影を見つめる語り手である詩人は、正午になったその瞬間、恋人たち、そして万物が、“to brave clearnesse all things are reduc'd”と、「透明」の中に消失する様を描く。長閑な散歩の風景は影のない非現実的な世界へと一変する。正午、noonは古くはイエス・キリストが亡くなった午後3時を意味するが、太陽が真上に来る正午を指すようになって以降も、“the Sunne”、すなわち音を同じくする神のSon、御子キリストと語感的に相俟って、磔刑の特別な時間として認識される。太陽が真上に来た瞬間、恋人たちの今いる世界は聖書的時間・空間に吸収され、“brave clearnesse”が世界を包むこととなる。万物が透明な世界の中へ「収斂する」という鮮烈なイメージの中で用いられる“reduc'd”という語は、一義的には、「縮小する」という意味になるだろう。しかし、「元来あるべき状態に戻す」という語源的意味に見られるように、「再生する・復活する」といった意味があることを、*OED*がこの意味におけるダンの使用例も紹介しつつ示している¹⁸⁾。この“reduc'd”が持つ両義性にあるように、詩人は透明性の中に、消失と復活という、相反するベクトルが同時に作動する瞬間を幻視する。愛の哲学について解説されるのは、狭義においては恋人の肉体が透明な世界へと吸収され合一していくという恋人同士の愛であり、また広義においては人類の救済を贖うために神の子自らが十字架に掛けられ、その後復活を成し遂げた神の愛を意味する。このように詩人は究極の愛のトポスを透明性の中に見る。透明性に神性さを見て取り、ガラスを舞台とする「別れ、窓に彫られた私の名前」に再び戻っていこう。

4. 復活する身体

III.

Or, if too hard and deepe
 This learning be, for a scratch'd name to teach,
 It, as a given deaths head keepe,
 Lovers mortalitie to preach,
 Or thinke this ragged bony name to bee
 My ruinous Anatomy.

V.

Then, as all my souls bee,
 Emparadis'd in you, (in whom alone
 I understand, and grow, and see.)
 The rafters of my body, bone
 Being still with you, the Muscle, Sinew, and Veine,

Which tile this house, will come againe.

VI.

Till my returne, repaire

And recompact my scattered body so. (19-32)

奇抜な発想が次から次へと繰り出される本作品中においても、この箇所は名前とガラスが繰り広げる身体復活という、とりわけ大胆なイメジャリが展開する場面である。窓枠に収まったこのガラスには語り手の名前が硬く深く刻み込まれている。この名前について、「刻む」、ここでは“scratched”という表現も用いられているが、第1聯では“engraved”、“graved”が、また第6聯でも“graved” (35) という語が使われ、「刻む」という語が墓を想起する語によって表現される。この詩行において、さしずめガラスは「墓」であり、そして刻まれた名前は墓碑銘となっている。そして同時に、名前は詩人の肉体の“ruinous Anatomy”、すなわち、「崩れかけの骸骨」(anatomyには「解剖」という意味に加え、「骸骨」という意味がある)としてガラスに埋葬されている。魂がこのガラスの墓において恋人の傍にいる一方、骸骨と化した詩人の肉体は不完全な状態で今ガラスの上にある。しかし、彫られた名前を自分の死骸と見る牽強附会の着想を展開する詩人の詩句が織りなす力技はそれだけに留まらず、この墓に眠る骨に向かって、「筋肉、神経、血管」と、解剖されていた体の各部位の具体的な名称が、畳みかけるように列挙され、骨を覆うべく一気に帰還し、体を立て直すという生々しい肉体の復活劇が描かれる。さらに詩人は、“returne”、“repaire”、“recompact”と、復活を促すre-の頭韻を3度響かせつつ、身体復活のスペクタクルをこのガラス上で展開する。

このようにガラスに彫られた名前について想像力を駆使する詩人の語りが想定している身体復活が、最後の審判の前になされる大文字の“Resurrection”であることが、下線部“my scattered body”と同様の表現が用いられている宗教詩「聖なるソネット7番」(“Holy Sonnet VII”)において確認できる。

At the round earths imagin'd corners, blow
Your trumpets, Angells, and arise, arise
From death, you numberless infinities
Of soules, and to your scattred bodies goe...¹⁹⁾ (1-4)

地球の四隅から世界に響き渡る天使の吹くラッパの音は、最後の審判の幕開けを世界に告げる。ダンの作品には復活への言及が度々なされるが、“my scattred body”と、さきほど自分の死した体を詠っていた詩人の脳裏には、ここでは「散らばった肉体」が複数で表わされる“your

scattered bodies”と、無数の魂と肉体の復活という、神による人類救済のヴィジョンが刻み込まれていたことが窺える。この“scattered”が表わす、ばらばらになってしまった復活を待つ肉体というイメージはダンを捉えて離さない。さらに散逸した肉体は粉碎され、細かな粒子となり、ガラスの器の中に入れられるという新たなイメージを生み出す。このガラスのイメージが、2つのLent Sermon、すなわち灰の水曜日から復活祭までの四旬節についてなされた1629年の説教とそれから2年後、ダンの人生最後の説教のシーンで現れる。

まず1629年の説教を見ていこう²⁰⁾。

I have seen Minute-glasses; Glasses so short-liv'd. If I were to preach upon this Text, to such a glass, it were enough for half the Sermon; enough to show the worldly man his Treasure, and the object of his heart (*for, where your Treasure is, there will your Heart be also*) to call his eye to that Minute-glass, and to tell him, There flows, there flies your Treasure, and your Heart with it. But if I had a Secular Glass, a Glass that would run an age; if the two Hemispheres of the World were composed in the form of such a Glass, and all the World calcin'd and burnt to ashes, and all the ashes, and sands, and atoms of the World put into that Glass, it would not be enough to tell the godly man what his Treasure, and the Object of his Heart is. (*Sermon IX 173*)

説教壇に上がったダンの眼差しの先には、彼に時間を知らせる砂時計がある。この時計を見つめながらダンは聴衆に語りかける。斜体で示されたマタイによる福音書の一節について、天にこそ富は積むべきなのに、“worldly man”、人生において世俗の富ばかりを追っている人間には、砂時計が測るわずかな時間だけでも十分すぎるくらいだと訓戒を垂れる。そしてこうした虚しい人生の在り様を見せた小さなガラスの砂時計はダンの想像力の跳躍台となり、下線部、“if”という仮定で聴衆を誘いながら、彼らに大きな“Secular Glass”を幻視せしめることとなる。“Secular”、「世俗的な」という意味に加え、「一世代の」の意味を持つ語が冠された砂時計は、終焉へと向かい、零れ落ちていく人生の時の流れを示す巨大なガラスの時計である。この砂時計それ自体が一個の人間の実物大となり、まざまざと人の生と死のスパンを見せる。更にこの幻想は“if”、と延長され、世界の両半球が砂時計の形に組成され、巨大な球体となり、その中に灰、砂、原子と化した全世界が砂時計を流れ落ちる砂となって包含される様を、ダンは言葉で聴衆たちの前に出現させる。世界を極大の砂時計に見立てるダンは、“all the World calcin'd and burnt to ashes”と、まるで茶毘に付すかのような表現の中で、世界は死を象徴する灰へとその姿を変え、この強大なガラスの球体はそれ自体がまるで巨大な墓場として語られる。小さな砂時計から極大の砂時計へと連想を拡大させることにより、詩人は、“godly man”、敬虔

なる人にとってはそれでもなお神を想い、天を想うのには十分ではないと戒めを説く。

この説教の2年後、ダン最後の説教『死の決闘』(*Deaths Duell*)、が信徒の前でなされようとする時、ダンの伝記を1640年に記したアイザック・ウォルトン (1593-1683) は、説教壇に上がるダンを目撃する。

And, when to the amazement of some beholders he appeared in the Pulpit, many of them thought he presented himself not to preach mortification by a living voice; but, mortality by a decayed body and dying face. And, doubtless, many did secretly ask that question in *Ezekiel*; *Do these bones live? Or, can that soul organize that tongue, to speak so long time as the sand in that glass will move toward its centre, and measure out an hour of this dying man's unspent life? Doubtless it cannot.*

(*The Life of Dr. John Donne* 75)

まるで生ける屍のように滅びゆく肉体を、聴衆に晒すダンの壮絶な姿に驚愕しつつ聴衆たちは、“*Do these bones live?*” とひそかに尋ねたのだと、ウォルトンは報告する。そして骨と化したかに見えるダンの姿を見つめる聴衆の視線は、彼の前に置かれた砂時計へとスライドしていく。彼の零れ落ちていく生の時間が砂と重なり合い、詩人の身体をガラスの砂時計として捉えさせたその瞬間の情景を、ここでウォルトンは切り取っている。

しかし、この伝記は誤読を誘っている。斜体で示される部分が、旧約聖書のエゼキエル書からの出典だとこの表記では読めてしまう。しかし、“*Do these bones live?*” の質問の続きには、砂時計への言及は出てこない。この問いかけに対する答えは、エゼキエル書の中にある。この質問に対する正しい答えは「お前たちの上に筋肉を置き、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。するとお前たちは生き返る」(37章5～6節) という、肉と霊からなる復活なのである。

“*Do these bones live?*” という、復活を示す神の問いかけに、ウォルトンはダンの骨と化した身体に触発され、砂時計への言及を被せていった。ここで今一度砂時計の形状を思い起こしてみると、砂時計には中心を境に二つの球体があり、これの球体は図像学的に過去と未来を象徴するとされている。ウォルトンがダンの死の瞬間を「砂が中心に落ちるまで」と表現する時、ダンがこの世からあの世に行く、すなわち、死から復活へと移行する様を、期せずしてか象徴的に見ていたことを彼の誤謬は示している。そしてこの言語空間において、聴衆たちの前に人間の、そして世界の等身大の砂時計を出現させたダンこそ誰よりもこの砂時計が表す死と復活のイメージを鮮明に抱いていたのではないか。

聖書において幾つかある復活への言及の中でも、極めて具体的にいかに身体が復活するのを描いたエゼキエル書は、ダンも死の前年の説教で引用している。骨に向かい筋肉、肉、皮膚

が戻ってくる描写が、ガラスに刻まれた名前を骨とした「別れ、窓に彫られた私の名前」の復活シーンにおいて想像力の源泉になっていたと見るのは、それほど間違いではないであろう。

恋愛詩に復活という壮大なヴィジョンを持ち込んだ「別れ、窓に彫られた私の名前」の最後の箇所を見ておこう。

But glasse and lines must bee,
No meanes our firme substantiall love to keepe ;
Neere death inflicts this lethargie,
And this I murmure in my sleepe ;
Impute this idle talke, to that I goe,
For dying men talke often so. (61-6)

詩人は最後、ガラスと名前の線が描き出すこの詩行を単なる「戯言」であったとする。この作品において、これらは単なる「手段」だったと言い放つのだ。ダンのこの言葉は、一面的な思想で彼の詩を読もうとすることへのダンの嘲笑のように聞こえる。そしてまた、あれほどまでの壮大な復活のスペクタクルをこの詩空間において展開しておきながらも、あっさりと梯子を外してみせる融通無碍なダンの詩的想像力を申告しているかのようである。その一方、“Neere death”、“this lethargie”、“my sleepe”、“dying men”と最後まで徹底して死を詩行に擦り込み、この死への固い思念によって詩人が織りなす壮大な復活のスペクタクルを愛の詩に同化させるという、詩人のみに許される凝縮された豊かな言語操作による詩作をダンはこの詩で披瀝した。

おわりに—墓場のダン

最後に、「戯言」が削ぎ落された詩人が書いた妻の墓碑銘を見ておきたい。

Maritus (misurrimum dictu) olim charae charus
Cineribus cineres spondet suos
Novo matirimonio (annuat Deus) hoc loco sociandos
Iohannes Donne²¹⁾

ラテン語で書かれた妻アンの墓碑銘制作を、ダンはジェイムズ一世、チャールズ一世の治世において首席石工を務めた当代随一の彫刻家ニコラス・ストーン（1586/87-1647）に依頼した。ストーンによって彫られた墓碑銘自体はもう失われているが、アンが誰の孫であり娘であり母

親であり、そして妻だったかということが淡々と書かれ、あの奇想を思うが儘に展開することを得意とするダンの書いた墓碑銘としては驚くほど素朴である。この言葉が削ぎ落された墓碑銘において、ダンはその最終部分、「新しい結婚において」、「この場において」と、この墓における、そして神の国における新たな結婚を約束する。揺籠よりも墓場と詠った詩人にとって、墓場こそ永遠の愛を語るのに一番ふさわしい場なのである。そしてこの墓石には、傍らにいられない詩人の代わりに、硬く「ジョン・ダン」という名前が刻みこまれた。

ストーンの代表作は、セント・ポール大聖堂にある骨壺の上に立ち、死に装束を纏い、審判の瞬間に立ち上がる詩人ダンの記念碑である。この彫像の元となったのは、ダンが死の直前描かせた等身大の経帷子を纏った肖像画であり、死の床でダンは、墓に埋葬される自分自身の姿を見つめつつ、最後の瞬間を迎えた。1666年のロンドン大火においても消失しなかったこの像は、その後合理主義が拡張する中忘れられ、そして19世紀に新しく再建された大聖堂において、ほぼ元あった場所に再び配置され、今に至る。ダンのこの像は、この聖堂で祈りを捧げる者、そして17世紀の偉大な詩人であり説教師であった彼の姿を見るために訪れる者に、復活する肉体への高揚を思い出させ、共有させる装置として働く。

経験科学の台頭が、自然の法則に従う物質としての肉体の領域と魂の領域とを分断し、キリスト教の核心である霊肉一体の復活体がその意味を問われ、その絶対的価値に揺さぶりがかけられる中、ダンは肉体の分解と審判の日における復活のメカニズムに拘り続けた。この点において、先に述べたようにダンは「正しく」復活論者である。しかし、ダンが単に保守的・伝統的にキリスト教の教義をなぞった人物でないことは、本稿で紹介したダンの詩においても、また説教においても明らかであろう。ダンは死に囚われた詩人であった。けれどもただ神の国に行くことを人間存在の目的に据えたのではなく、同時代の誰よりも徹底的に肉体の物質性に拘ることにより、慣習的に理想化された身体描写に甘んじることなく、現世における生の営みをその肉体に刻むリアルな身体を詩行で示した。死と生に対するダンの肉体観を考慮することで、神学と文学を横断するダンの世界観の一端を理解することができるだろう。

注

- 1) 復活したキリストが肉体を持つことは、例えばヨハネの福音書20章25節の不信仰なトマスの、懐疑を示す「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘後に入れて見なければ、また、この手をそのわき腹に入れて見なければ、私は決して信じない」という発言においても明らかのように、キリストの復活した姿は亡霊などではなく、肉体を伴っていることが念押しされる。本稿における聖書への言及は原則、欽定訳聖書に拠る。
- 2) 輪廻転生の概念はギリシャの哲人ピタゴラス（紀元前582-紀元前496）によって説かれ、この概念は霊

肉二元論を展開したプラトン（紀元前427-紀元前347）にも影響を与えた。ピタゴラスの輪廻転生論はエリザベス朝イングランドでも、一部の文人の関心を呼び、ダンもこの概念に着想を得て『魂の遍歴』を作詩している。

- 3) 死者の肉体を伴った復活について、原始キリスト教時代においても異論が信者の中から出た。しかしパウロはコリントの信徒への手紙の中で、復活信仰を主張し、宣教の手立てとした。
- 4) 肉体と霊とを死によって分かれるものとして、対照的に論じた研究としてFelecia Wright McDuffieの*To Our Bodies Turn We Then: Body as Word and Sacrament in the Works of John Donne*、Robert N. Watsonの*The Rest Is Silence: Death as Annihilation in the English Renaissance*を参照。また肉体の霊性ではなく物質性に注目した研究としてHirsch, David A. Hedrichの“Donne’s Atomies and Anatomies: Deconstructed Bodies and the Resurrection of Atomic Theory”を参照。
- 5) *John Donne, Body and Soul*においてターゴフは、先行研究について、“Donne’s attitude toward his earthly body has been the subject of a number of fine studies, but little attention has been paid to his preoccupation with body he will assume in heaven” (16)と述べ、ダンの肉体観に新たな視座を提示し、書簡、恋愛詩、宗教詩、説教など、あらゆるジャンル、作品を横断して、ダンがいかに靈魂と身体の関係性に固執していたかを追求する。とりわけ靈魂と肉体の別離を謳う代表的な作品『二周忌の歌・魂の旅について』を通して、キリスト教の教義のみならず、靈魂分生説、アリストテレスの質量形相論、ピタゴラスの輪廻転生論などを参照にしながら復活体について論じる(79-105)。本稿ではこうした別離の問題が、これらの大作以外にも読み取ることが可能なかに注目した。
- 6) Gilの*Fate of the Flesh: Secularization and Resurrection in the Seventeenth Century*は、ダンの復活詩学の解説(29-63)に加え、17世紀当時の復活論について詳細な解説を行っている。経験主義、懐疑主義、無神論の台頭が肉体を伴った復活の教義に修正を試みる中、イングランド最初の理神論者と言われるエドワード・ハーバード(1582-1648)が、肉の体は、人格として認識し、霊の体のみの復活を理性的なものとして主張した。彼の母マグダレンがダンのパトロンであり、彼女の息子たちともダンは友好があったが、エドワードの弟で、形而上派の詩人として著名なジョージ・ハーバート(1593-1633)、そしてヘンリー・ヴォーン(1622-95)といった詩人たちは宗教詩の中でダン同様、肉体の復活について語る。このように身近な者同士であっても、初期近代は各々が様々な思考を復活神学に対して示しているとする。
- 7) ダンの詩の引用はすべてGrierson版に拠る。スペル、斜体は原文通り、下線は筆者による。なおダンの詩句の引用は、本文中に作品タイトル、行数を掲示することに加え、注において*The Poems of John Donne*、頁数と、作品の掲載箇所を示す。
- 8) *The Poems of John Donne*, 93-4.
- 9) 16世紀のフランス文学の詩のジャンルであるブラゾンとは、もともとは紋章学の要素が強いものであったが、その後、女性を賛美するために、体の各部位をそれぞれに称賛していくテクニクとして用いられた。
- 10) 従来の理想化された身体表象と比較し、行き過ぎたようにも見えるダンのグロテスクな身体表現は、たとえば14世紀以降作られた腐敗屍骸(トランジ)像に見られるように、死による肉体の崩壊を露わに

する像が作成されたことから、際立って異例とは言えないが、トランジがメント・モリの発想から発生したものである点において、ダンの身体表象とは異なると考える。

- 11) *The Poems of John Donne*, 291.
- 12) 黄金化する肉体も興味深いテーマだが、ここではsoules dignifie/ Us to be glasseという詩行で示される、魂と肉体という、人間を人間たらしめている二つの構成要素をガラスに見たダンの主張に集中するために、参考文献にあげたKellerの“The Science of Salvation: Spiritual Alchemy in Donne’s Final Sermon”が、錬金術思想と復活思想の共鳴をThe Science of Salvation、「救済の科学」とした論考が一つの見地を与えている、という紹介に留める。
- 13) *The Poems of John Donne*, 25-8.
- 14) “quick corse”あるいは、“walking sepulchre”のラテン語表記は“Vivum cadaver, vivum sepulchrum”である(Schoell 202)。1500年初版の『格言集』は、ギリシャ、ローマの古典に加え、聖書からの格言を集め、版を重ねるごとにその数を増やしていったルネサンスが到達したキリスト教人文主義を示す作品の一つである。イングランドにおける当時のエラスムス作品の流通の証左として参考文献に示したエラスムスの*Proverbes or Adagies*、1536年出版のfacsimile版などが挙げられるが、実際ダンの同時代の文人がどのようにエラスムスを受容したかについては、Franck L. Schoellの“G. Chapman’s ‘Commonplace Book’”において解説されている。この研究において、エラスムスの格言がどの版によって当時の文人によって親しまれていたかということは特定はされていないものの、例えば、デュ・バルタス(1544-90)による使用によって流布していたものを備忘録に書き留め、それを文人が自分の作品の中で翻訳・翻案したことが指摘されており、エラスムス受容の裾野の広さが窺える。
- 15) たとえば、スペインの作家ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ(1547-1616)も、1613年出版の『模範小説集』に収録された短編「ガラスの学士」の中で、学識があるにも関わらず、薬によってガラスの身体を持つと思ひこんだ男を描いた。15世紀から17世紀初めまで、ガラスという貴重な素材は「ガラス妄想」という、過度に自分の身体が脆い存在であると思ひこむメランコリーの病の症状を生み出した。
- 16) *The Poems of John Donne*, 218-20.
- 17) *Ibid.*, 71-2.
- 18) reduce, v. II. 6. b. のTo lead or bring back (a person) from error, sin, immorality, etc.; to restore to the truth or the right faithという定義に沿うものとして、ダンの『自殺論』(II. iii.)における“It is not a better understanding of nature, which hath reduced us from it”をOEDは挙げている。
- 19) *The Poems of John Donne*, 323.
- 20) ダンの説教の引用は、George R. Potter, Evelyn Simpson編纂版に拠る。スベル、斜体は原文通りであり、下線は筆者による。
- 21) アン・ダンのラテン語による墓碑銘はR.C.Baldによるダンの伝記に掲載(325)の他、アンとの結婚についてM. Thomas Hester 他編纂の*John Donne’s Marriage Letters in the Folger Shakespeare Library*も詳細な情報を与えてくれる。

参考文献

- Bald, R.C. *John Donne: A Life*. Oxford: Clarendon P, 1970.
- Chapman, George. *The Conspiracy and Tragedy of Byron*. Ed. by John Margeson. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Charleston, R.J. *English Glass and the Glass Used in England, circa 400-1940*. London: George Allen and Urwin, 1985.
- Cohen, Kathleen. *Metamorphosis of a Death Symbol: The Transi Tomb in the Late Middle Ages and the Renaissance*. Berkley: U of California P, 1973.
- Donne, John. *John Donne's Marriage Letters in the Folger Shakespeare Library*. Eds. by M. Thomas Hester, Robert Parker Sorlien, and Dennis Flynn. Seattle: U of Washington P, 2005.
- . *The Divine Poems*. Ed. By Helen Gardner. 2nd ed. Oxford: Clarendon P, 1978.
- . *The Oxford Edition of the Sermons of John Donne: Sermons Preached at the Court of Charles I*. Ed. by David Colclough. Oxford: Oxford UP, 2013.
- . *The Poems of John Donne*. Ed. by Herbert J.C.Grierson. 2 vols. Oxford: Oxford UP, 1912.
- . *The Poems of John Donne*. Ed. by Robin Robbins. 2 vols. Harlow: Pearson Education, 2008.
- . *The Sermons of John Donne*. Eds. by George R. Potter and Evelyn Simpson. 10 vols. Berkeley: U of California P, 1953-62.
- . *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*. Ed. Gary A. Stringer, et al. 4 vols. (to be completed in 8 vols.). Bloomington: Indiana UP, 1995.
- Erasmus, Desiderius. *Proverbes or Adagies*. New York: Da Capo P, 1969.
- Gil, Daniel Juan. *Fate of the Flesh: Secularization and Resurrection in the Seventeenth Century*. New York: Fordham University Press, 2021.
- Grabes, Herbert. *The Mutable Glass: Mirror-Imagery in Titles and Texts of the Middle Ages and English Renaissance*. Trans. by Gordon Collier. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- Guibbory, Achsah. "John Donne and Memory as 'The Art of Salvation.'" *Huntington Library Quarterly*, Vol. 43, No. 4, John Donne Issue (Autumn, 1980): 261-74.
- Hirsch, David A. Hedrich. "Donne's Atomies and Anatomies: Deconstructed Bodies and the Resurrection of Atomic Theory." *Studies in English Literature, 1500-1900*, Vol. 31, No. 1, (Winter 1991):69-97.
- Kalas, Rayna. *Frame, Glass, Verse: The Technology of Poetic Invention in the English Renaissance*. Ithaca: Cornell UP, 2007.
- Keller, James R. "The Science of Salvation: Spiritual Alchemy in Donne's Final Sermon." *The Sixteenth Century Journal*, Vol. 23, No. 3 (Autumn, 1992): 486-93.

- Locke, John. *An Essay Concerning Human Understanding*. Hassocks: Harvester P, 1978.
- McDuffie, Felecia Wright. *To Our Bodies Turn We Then: Body as Word and Sacrament in the Works of John Donne*. New York: Continuum, 2005.
- Mazzeo, Joseph Anthony. *Renaissance and Seventeenth-Century Studies*. New York: Columbia UP, 1964.
- Panofsky, Erwin. *Perspective as Symbolic Form*. Trans. by Christopher S. Wood. Cambridge, Mass.: Distributed by MIT P, 1991.
- Parr, Anthony. "John Donne, Travel Writer." *Huntington*, Vol. 70, No. 1 (Mar. 2007): 61-85.
- Ringler, Richard N. "Donne's Specular Stone." *The Modern Language Review*, Vol. 60, No. 3 (Jul., 1965): 333-9.
- Sanders, Wilbur. *John Donne's Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 1971.
- Saunders, Ben. *Desiring Donne: Poetry, Sexuality, Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2006.
- Shami, Jeanne. *John Donne and Conformity in Crisis in the Late Jacobean Pulpit*. Cambridge; New York: D.S. Brewer, 2003.
- Schoell, Franck L. "G. Chapman's 'Commonplace Book.'" *Modern Philology*, Aug., 1919, Vol. 17, No. 4 (Aug., 1919): 199-218.
- Shuger, Debora. "The 'I' of the Beholder: Renaissance Mirrors and the Reflective Mind," in *Renaissance Culture and the Everyday*. Ed. by Patricia Fumerton and Simon Hunt. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1999. 21-41.
- Stringer, Gary. "Learning 'Hard and Deepe': Biblical Allusion in Donne's 'A Valediction: Of My Name, in the Window.'" *The South Central Bulletin*, Vol. 33, No. 4, Studies by Members of SCMLA (Winter, 1973): 227-31.
- Stubbs, John. *Donne: The Reformed Soul*. New York: Viking, 2006.
- Targoff, Ramie. *John Donne, Body and Soul*. Chicago: U of Chicago P, 2008.
- . *Posthumous Love: Eros and the Afterlife in Renaissance England*. Chicago: U of Chicago P, 2014.
- White, Helen C. *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience*. New York: Collier Books, 1962.
- Walton Izaak. *Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*. Ed. by George Sainsbury. Oxford: Worlds Classics, 1927.
- Watson, Robert N. *The Rest Is Silence: Death as Annihilation in the English Renaissance*. Berkeley: U of California P, 1994.
- 大貫隆編著.『イエス・キリストの復活—現代のアンソロジー—』日本キリスト教教団出版局, 2011.
- スタロバンスキー、ジャン.『ルソー 透明と障害』山路昭訳.みすず書房, 1993.
- セルバンテス、ミゲル・デ.「ガラスの学士」『セルバンテス短篇集』牛島信明訳.岩波書店, 1988.

(ともだ・なつこ 外国語学部講師)